

6 札幌駅前通及び創成川通における主要な樹種の選定

(1) 札幌駅前通

ア 現状

(7) 樹木の現況

- 中央分離帯に植栽されているハルニレは、昭和 48 年（1973 年）、千歳市内の山林から根回しによって養成された樹木が植栽されたものです。（南 4 条まで同一時期に植栽されています）
- 歩道部のニセアカシアも同時に植栽されたが、風倒や危険木による伐採等で、かなりの本数が植え替えられています。（北 1 条・宮の沢通～南 4 条線の国道部分にはトチノキが植栽されています）
- ハルニレの生育は良好であるが、地下の土壌が薄いところや乾燥が激しい部分の樹木では既に衰退期に入っているものがあり、限られた植栽基盤での生育には限界があります。
- 根系は浅根性であり、分離帯全域に根を広く張り巡らせています。
- 垂下根も発達しており、低下する水分を求めて深く根を伸ばしたことも考えられます。

(4) 移植への適応性

- ハルニレは根回しによる発根性も良好であり、作業性もよいので、根回しをして移植することは十分に可能です。ただ、その際にはかなりの枝落としが不可欠となり、そのダメージからの回復にはかなりの時間を要するものと考えられます。
- ニセアカシアは小さな植樹ますに植えられており、作業性が悪く根回しをすることが不可能であるため適期の移植で対応するしかありませんが、植え傷み（衰弱や枯死）は相当出でくるものと考えられます。
- トチノキはまだ植栽後数年しか経っておらず、移植は可能です。

(7) 再移植への適応性

- 樹木が老齢化するにつれ、移植のダメージからの回復には時間がかかるとともに個体差がでてくるため、統一した並木景観形成の視点からは、再移植には適さないと判断されます。

イ 検討条件等

- 既存のハルニレは良好地に移植し、駅前通の整備後は新しい樹木を植栽します。
- 厚さ 1.5m の植栽基盤は、理論的には高木の生育可能な植栽基盤であるとはいえ、下には地下通路の躯体が、両サイドには駅前通の路盤があることから、地下水の涵養が十分に行われません。（より乾燥に耐える樹種を選定する必要があります）
- 根系の張りが十分でなくなると、風倒に対する抵抗性が著しく低下します。

ウ 街路樹の選定

(7) 中央分離帯の街路樹

a 選定樹種

オオバボダイジュ

b 選定理由

- ・中央分離帯にふさわしい、ゆつたりと大きな樹冠を形成
- ・ハルニレに比べ樹木そのものの強度が高く、強風による枝折れも少ない
- ・郷土樹種
- ・根系が浅根性であり広がらず、限られた植栽基盤に適応しやすい
- ・ハルニレは、大通以南での生育状況から判断すると、整備後に 1.5m という植栽基盤の厚さでは、十分な生育が望めない
- ・ハルニレは、本来、適潤性であることから、創成川沿いの緑地空間を都心における新たな生育の場として確保

(4) 歩道部の街路樹

a 選定樹種

ニセアカシア

b 選定理由

- ・今から 120 年近くもの昔に植えられた歴史性を重視
- ・外来種とはいえ、様々な詩にも詠われ、札幌の街のイメージを醸し出す素材

c 課題

平成 16 年度の台風 18 号による緑化樹の被害報告書（石狩支庁、平成 17 年 3 月）において、倒木被害の多い緑化樹にあげられており、事業実施に向けては詳細の技術検討が必要です。

(ウ) 大通以南における植樹の考え方

- 中央分離帯のハルニレは、土厚の状況は違うものの、地下街の躯体及び道路路盤に囲まれた空間であることから十分な生育がされていない状況にあります。このため、将来、枯損等が生じた場合にはより適応しやすいオオバボダイジュに植え替えます。（今回の再整備区間外となる北 4 条線～北 5 条・手稲通区間についても同様の扱いとします）
- 歩道のトチノキは、植樹して間もないこと、既存樹木の生育状況が良好なこと、街並みの違いがあること等を踏まえ、現状のままとします。

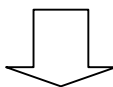
札幌駅前通 中央分離帯候補樹種の比較

樹種名	ハルニレ	オオバボダイジュ (シナノキ)	トチノキ	アカナラ
科名	ニレ科	シナノキ科	トチノキ科	ブナ科
分布	全道に分布	全道に分布	道内では西南部に分布	外来種 (北アメリカ原産)
将来樹高	20～25m	15～20m	20～25m	20～25m
陰陽別	好陽性	好陽性	陰樹だが陽地でもよく育つ	好陽性
耐乾性	適潤からやや湿ったところを好む 多少の乾燥には耐える	適潤地を好む 湿地乾燥地は好まない	湿り気のある肥沃な 深層土を好み 乾燥を嫌う	やや乾燥地でも耐えられる
対公害性	普通	普通	普通	普通
生長の度合い	早い	普通	やや早い	やや早い
移植性	容易	普通	容易	よくない
根系の広がり	浅根性で 広がりは大きい	浅根性で 広がりは中間性	深根性で 広がりは小さい	深根性で 広がりは小さい
その他	現在の駅前通植栽樹種 北海道を代表する落葉広 葉樹でアイヌの時代から シンボリックな扱いをされ てきた	東西線の上の南大通 円山付近の中央分離帯 植栽樹種 近縁種のフユボダイジュ はリンデンバウムとして ヨーロッパの主要街路樹	石山通の中央分離帯 植栽樹種 近縁種のセイヨウトチノ キはマロニエの名で知ら れている	東西線の上の南郷通 東札幌付近の中央分離帯 植栽樹種

※『北海道の緑化樹』北海道造園建設業協会編 より抜粋、一部付記



完成当初のイメージ



10年後のイメージ



※このイメージは、現況写真に計画樹種を挿入したものであり、歩道及び車道の幅員等は既存のままとなっています

(2) 創成川通

ア 現状

(7) 樹木の現況

- 緑地の主木を構成するシダレヤナギは、昭和46年（1971年）アンダーパス建設に伴って植栽されたものが主体となっています。（樹木は愛知県の苗圃より植樹）
- 生育は良好であるが、幹に胴枯菌が侵入して内部が腐朽しているものが多く、危険木として伐採されたものがあるほか、順次補植も行われているため樹木の大きさにはばらつきがあります。
- 根系は樹木の特性のとおり深根性であり、地中深くにまで太い垂下根を伸ばしています。

(4) 移植への適応性

- シダレヤナギの移植適応性は一般に良好であり、健全な小～中径木であれば、移植は容易であると考えられます。
- ただし、以前の樹木調査から時間が経っていることや、今回の根系調査によって地下の状態を確認できたことを踏まえ、大径木が多いこと、幹に腐朽が入っているものが大多数である現状などを考慮すると、移植の困難なものが多数を占めていると考えられます。
- ライラック等の中低木は、移植することは可能です。

(7) 再移植への適応性

- シダレヤナギは枝だけでなく、根の傷からも腐朽が進行しやすく、移植によるダメージはかなり大きいものと考えられます。
- 短期間での再移植では、移植のダメージからの回復すら困難になると考えられ、再移植には適さないと判断されました。

イ 検討条件等

- 都心部では貴重な親水空間である環境を活かします。
- 札幌のシンボリック緑地軸として、ボリューム感のある緑の固まりをつくり出します。
- 河道沿いにはアンダーパスの躯体が無く、十分な土厚が確保できるため、大木となる樹木を植栽します。
- 大木は、緑の連続性を確保し、河川への視認性を遮らない適度なピッチで配置します。
- 両側の車道際には、低木類を列植することにより、通行車両の遮蔽植栽を行い、緑地利用者のアメニティを高めるように配慮します。
- 緑の連続性を確保しつつ、通行車両に対してリズム感を与えるために、一定のリズムで中木を配置します。
- 散策路と河川との間は、絶えず河川が見えるよう、開放的な空間とします。
- 具体の植栽計画は地上部の実施設計時に行うこととするが、その際、冬季の景観（樹形等）を考慮のうえ、検討するものとします。

ウ 街路樹の選定

(7) 河道沿い

a 選定樹種

ハルニレ

b 選定理由

- ・北海道を代表する落葉広葉樹で適潤性の樹種
- ・駅前通のハルニレの代替として、数十年から百年をかけて、大きな緑の固まりを作り出すことが可能

(4) エッジ部（車道際）

a 選定樹種

ハシドイ、ライラック等（シロライラックほか、ライラックの多彩な品種群等）を中心とした高、中、低木

b 選定理由

- ・土被りが薄く、高木の植栽が難しい場所には、札幌のシンボルツリーであるライラックの並木を育成
- ・既に川下公園に導入されている多彩な品種群に合わせ、既存の早咲きのシロライラックを植え戻すことにより、大通と合わせた見どころ空間を作り出し、回遊効果を高めることを期待
- ・緑地利用者にとって、通行車両を遮蔽することにより、車からの負荷が軽減されることが研究からも明らかになっており、連続性のある低木植栽を行なうことが効果的

(7) 歩道部の街路樹

a 選定樹種

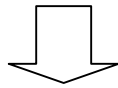
カツラ

b 選定理由

- ・イタヤカエデ、シダレヤナギからカツラに樹種転換が進められている、北1条以北の国道部と協調






完成当初のイメージ



10年後のイメージ



参考：樹木の特徴

	ハルニレ	オオハバロダイジュ (シナノキ)	トチノキ
将来樹高	20～25m	15～20m	10～15m
生長	早い	植栽当初は遅いが、生長が始まると早い	植栽後2～3年は極めて生長が遅いが、その後の生長早い
根系	浅根性で広がりは大きい	浅根性で広がりは中程度	深根性で広がりは小さい
耐性	耐乾燥性：適潤～やや湿つてもよく育つ、多少乾いても育つ 耐公害性：普通	耐乾燥性：適潤地を好む。湿地、乾燥地は好まない 耐公害性：普通	耐乾燥性：多少湿り気のある土地を好み、乾燥地を嫌う 耐公害性：普通
見どころ	主幹は自立たないが、上方側方ともに勢いよく枝を伸ばし、雄大な樹形となる 秋の黄葉が美しいが、場所によっては褐変して見苦しいまま終わることがある。 ・耐雪性や耐寒性はある ・北海道における沖積平地の森林でよく見られる樹木で、雄大な樹形の大本に生長することから、北海道を代表する樹種である	卵形の美しい樹形で、ヨーロッパではセイヨウボロダイジュ(リンデンバウム)が多用され、世界の3大街路樹と称される 6～7月中旬に淡黄色の小花を房状に付ける。花は甘い香りがある。葉は秋に美しく黄葉する。 ・樹冠がまとまるため剪定は不必要 ・病虫害の心配は少ない ・秋の黄葉が美しい ・耐雪性や耐寒性がある	初め歪状、のち広卵形の整った樹形をしており、世界3大街路樹の一つである 花は植栽後10～15年しないとなかなか咲かないが、白に紫と黄が混じった花が房状につき、大変見事である。また、市街地では秋に葉が褐変する事が多い。 ・街路樹として有名 ・花が美しい ・緑のボリュームは十分である
長所	・耐雪性や耐寒性はある ・北海道における沖積平地の森林でよく見られる樹木で、雄大な樹形の大本に生長することから、北海道を代表する樹種である	・花に昆虫が集まりやすい	・葉が大きく落葉時期の清掃が大変 ・病虫害が起ることがある ・乾燥に弱く、乾燥が続くと葉が褐変して見苦しくなりやすい ・大きな葉が落下して車を傷つけることがある
短所	・黄葉するがあまり鮮やかではない ・根張りが浅く、歩道の舗装を持ち上げることがある ・ケムシが発生することがある		
写真			
その他	湿生林構成種	山地・丘陵林構成種	溪畔林構成種

	アカナラ	ニセアカシア	イタヤカエデ
将来樹高	20～25m	15～20m	15～20m
生長系	やや早い	早い	早い
根性	深根性で広がりは小さい 耐乾燥性：やや乾燥地でも耐える 耐公害性：普通	浅根性で広がりは大きい 耐乾燥性：低湿地より乾燥地の方がよい 耐公害性：強い	浅根性で広がりは中程度 耐乾燥性：低湿地、過乾燥地は嫌う 耐公害性：普通
臭どころ	若木の間は樹形が不整形であるが、成木になると広卵形で雄大な樹形となる。道庁から植物園の間の街路樹は特にすばらしい。 葉には深い切れ込みが入り、特徴的な形をしている。秋には赤褐色の美しい紅葉をし、11月中旬まで枝に付いてなかなか落ちないことが多い。 ・耐雪性や耐寒性はある ・紅葉は遅いが、在来樹種の葉が落ちる頃に真っ赤に色づいてよく目立つ	若木の間は枝が暴れやすいが、壮齢木になると自然樹形は雄大で、整った樹形になる 6月中旬に白い花が房状に咲いて美しい。花は甘い香りがあり、密も豊富なため昆虫がよく集まる。 ・札幌では古くから植えられており、歌に詠まれるほどゆかりがある ・土質を選ばず、やせ地やせき悪地にもよく生育する	若木のうちは新梢の伸びが大変強く、勢いよく枝を伸ばして逆円錐形の樹形を形成する。ある程度樹齢が重なると、自然にこんもりとした樹形となる 葉は秋に黄葉、ときに淡紅色となる。 ・北海道の森林ではごく普通に見られる ・生長は早く、強健である
長所			
短所	・10月中旬頃、雑沓の先の大きなドンズリが大量に成り、バラバラと落下して道路を汚すことがある ・樹勢が大変強く、どんどん大きくなるので定期的に剪定が必要である	・厳しい都市環境下では寿命も短く、幹や根に腐れも入りやすい ・根は浅根性で、風倒が多い	・放任すると葉張りが大きくなるので、ある程度の誘導管理が必要である ・モミジのように繊細な趣には乏しく、むしろモダンな感じである
写真	 南郷通南水から東札幌付近。地下鉄東西線の上の中央分離帯	 札幌駅前通。歩道上の街路樹	 北4条通。歩道上の街路樹
その他	北アメリカ原産、山地・丘陵林構成種	北アメリカ原産、山地・丘陵林構成種	海岸・山地・丘陵林